



TITLE:

## 実践型地域研究ニュースレター：ざ いちのち No.29

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア  
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた  
めの実践型地域研究

---

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会  
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニュースレター：ざいちのち No.29. 実践  
型地域研究ニュースレター：ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147110>

RIGHT:

# ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、  
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニュースレター No. 29 2011 年 3 月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 古浜

## 朽木フィールドステーション

### 在所をまとめるもの

東南アジア研究所 増田和也

「ムラというまとまりと神社は大きな関係があるのではないか」。日本の入会（いりあい）制を知ろうとインドネシア・中スラウェシからやってきた一行<sup>(註)</sup>が、福島・山形・滋賀の山村を廻るなかで、このようなことを話したことがある。たしかに、一行が訪れたいずれの集落にも、大きさにちがいはあれ神社があった。立派な木々に囲まれた神社は神秘的な雰囲気にも包まれ、独特の存在感をもつ空間である。

日本では入会地を利用できる者は、入会地をもつ集落の住民に限られることが多い。一方、中スラウェシの山城社会では人々の移動・移転はけっして珍しくなく、日本のように集落の構成メンバーが長期間にわたってほぼ一定であるということはあまり一般的ではない。そのため、インドネシアからの一行にとって、入会地を維持・利用する主体である集落（あるいはムラ・在所）というまとまりを自分たちの社会と重ね合わせることは容易ではなかったようだった。そのようななかで、神社は集落というまとまりを一つにするようなシンボリックな存在として映ったのかもしれない。

この2年ほど余呉の摺墨集落に通わせていただいているが、昨年はなるべく在所の暮らしを広くみようと、田んぼを囲む電柵張りをお手伝いさせていただいたり、神社の行事を見せていただいたりした。摺墨には水上神社という神社があり、年に5回の神事がある。この1月3日には新年のオコナイを見学させていただいた。この日は集落の集会所で餅をつき、お祓いの後に神社へ奉納する（写真）。集落の方は全員紋付袴を着用し、女人禁制の厳粛な神事だ。

かつて新年のオコナイは7日だったという。だが、7日が休日であるとは限らず、平日の場合は仕

事を休まなくてはならない。また、在所を離れる者が増えるなか、年末年始に里帰りした後に、間を挟んでふたたび里帰りをするのも容易ではない。こうして10年以上前に、オコナイの日にちは現在のとおり1月3日に変更された。宮司さんは摺墨出身で、父の代から宮司を引き継いでいるという。現在は大阪に住まわれており、神事のときに摺墨に戻ってこられる。このように、神社の行事は社会状況が変化するなかでも継続できるように変化が加えられてきた。

それでも、こうした行事を維持・継続するのはけっして容易ではない。神事以外にも、行政的なことから、田んぼの水管理など、在所の役はいくつもある。多くの山間地域と同様、摺墨でも人口減少と高齢化は進み、これらを引き受けるメンバーは特定の4-5人に限定されており、なかには一人で複数の役を重ねる場合もある。農業の兼業化が進むなかで、農作業は土日祝日に集中しておこなうことになるが、さらにこのような役が加わるのだ。現在、集落のまとまりは特定者の努力や負担の上に維持されているといえる。本ニューズレター第15号で黒田さん（滋賀県立大学／朽木 FS）は椋川集落に残る記録に山の生産力を最大限に引き出そうと知恵をしばってきいた村人の姿を思い、「人こそ生存基盤」と書いた。摺墨でこのようにして在所のまとまりを支える方々をみて、私は同じ言葉を思った。



写真：新年のオコナイ。奉納用の餅を桶に入れ、雪の中の神社に運ぶ。

（註）朽木 FS の島上研究員が中心となって2006年6月に実施した「いりあい交流」の取り組み。

## カン筏はどこからきたのか 一筏流しを通じた保津の筏士衆の生存基盤一

亀岡 FS 研究員 河原林洋

保津川（大堰川）の元筏士から昭和 20～30 年代の保津川筏について聞き取っている。昭和 25 年の世木ダムの完成をもって大堰川の流筏は終焉するが、昭和 10 年代には、貨車<sup>[1]</sup>による木材輸送の発展などに伴い、筏の中継地である保津・山本までの流筏は大きく減少していたようだ<sup>[2]</sup>。京北からの筏は、木材の両端に目穴をあけ、その穴にネソ（マンサク等の雑木を火であぶって捻ったもの）を通して組合わされていた（写真 1）。保津の筏士らはそれらを引き継ぎ、点検・修理して嵯峨まで運んでいた。昭和 10 年代の流筏数の減少をもって保津川筏が終焉したというわけではなく、その後も流筏量は減ったが、保津峡内での流筏は続くのである<sup>[3]</sup>。



写真 1：ネソで組まれる筏

ネソで組まれた筏（以下ネソ筏）は大量のネソを必要とする（表 1）。江戸時代の資料に「筏ねそ焼」という記述があるように農閑期に専門的にネソを作る人がいた<sup>[4]</sup>。京北の筏師・栗山氏の話では、ネソは自分で作らず、親方が購入して配布していた。当時、ネソ作りは冬の農家の内職であった。

表 1:1 乗あたりに使用される藤蔓・ネソ数(単位:本)  
～1 連 11 本の木材で 12 連の筏を組んだ場合～

	材	連組	連繋ぎ	幅木	舵	かせ木	計
カン筏	藤蔓	24	36	14	8	35	117
ネソ筏	ネソ	240	44	13	10	30	337

※京北町、保津町における聞き取りによる著者試算

それでは、京北等の地域の資材を利用して筏流しを行っていた保津・山本などの下流の筏士は、昭和 10 年代以降、どのようにしてネソ等の資材を調達していたのであろうか。マンサクの生育しない保津地域では、ネソの有無は流筏において死活問題で

あろう。そこで、注目されるのがカンである。昭和 18 年頃、保津町の酒井氏が筏士となった時、すでにカンと藤蔓で筏を組んでいた（写真 2）。昭和 18 年以前からカン筏は存在したということになる。大正 9 年頃まで約 2000～3000 乗の流筏数が、漸次減少し、昭和 10 年頃には、1023 乗に減少している<sup>[5]</sup>。これは嵯峨で算出された数字であるが、主に保津峡近辺からの流筏数が占めていたのではないだろうか。保津川の流筏数の減少に伴い、保津の筏士は、保津川の支流、水尾川や清滝川へと活動の場を移行してきたのではないだろうか。また大正～昭和にかけて、和歌山の熊野地域の林業従事者が亀岡地域に入り、その中には熊野川での流筏経験者<sup>[6]</sup>もいたようだ。保津の筏士たちは、流筏という生業を維持していくため、保津峡内での流筏数を増やしていくとともに、林業先進地の編筏技術を導入することで、簡素・簡略化（表 1、写真 1、2 を参照）させていったのではないだろうか。まだ実証する資料不足が否めない。今後は、亀岡の産業動向や人口動向などの資料を収集しながら、保津川筏の変遷と筏士の活躍を探っていきたい。



写真 2：カンと藤蔓で組まれる筏

### 脚注

- [1]明治 32(1899)年の京都鉄道の二条一園部間が開通した。
- [2]元筏士・上田潔氏の話によると、昭和 15 年頃には、京北からの筏は途中の八木駅（現南丹市）で貨車に積替えられ運ばれ、保津・山本までの流筏量は大幅に減少していたという。
- [3]保津峡内においては昭和 30 年前半までは、流筏は行なわれていた（本ニューズレター第 4 号参照）。
- [4]藤田叔民「近世木材流通史の研究」（新生社）1973 年 P104 第 10 表参照。
- [5]藤田彰典「木の文化誌」（清文社）1993 年 P158 図表 23 参照。
- [6]熊野川上流の北山川では、大正年代からカンを使った編筏が行なわれていたそう。島田錦蔵「流筏林業盛衰史」（林業経済研究所）1974 年 P30 参照。



## 地域づくりフォーラムを終えて

滋賀県立大学 地域づくり教育研究センター  
特定研究員 近藤紀章

### 1. 概要について

2011年3月4日（金）に、第一回地域づくりフォーラム（主催：滋賀県立大学地域づくり教育研究センター、共催：京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所）が開催された。会場はライズヴィル都賀山で、参加者は142名であった。

当日は、主催者あいさつ、来賓の守山市長あいさつの後、赤坂憲雄氏による基調講演「地域学から東北学へ」が行われた。



写真1：赤坂憲雄氏による基調講演会

次に、「いま、地域を問う ―いくつもの地域学が結ぶ、あたらしい日本のかたち―」をテーマにパネルディスカッションを行った。パネリストとして、赤坂憲雄氏、阿部健一氏（総合地球環境学研究所教授・プログラム主幹）、近藤隆二郎氏（滋賀県立大学環境科学部准教授、NPO 法人五環生活代表理事）に加え、京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所の京滋 FS 事業から、高谷好一氏（聖泉大学教授）および黒田末壽氏（滋賀県立大学人間文化学部教授）の5名を迎えた。



写真2：パネルディスカッションの様子

この後、フォーラム終了後に、会場を守山フィールドステーションに移し、パネリストを囲んでの意見交換会を実施した。なお、このフォーラムの内容は「第一回地域づくりフォーラム報告書」として別冊子にまとめられているので、そちらを参照されたい。

### 2. 今後の展望について

このフォーラムをどう感じたのか、それは参加者のコメント、アンケートに委ねたい。そこで、まとめにかえる形で、今後の展望について述べておきたい。

今回お招きした赤坂先生の表現を借りるならば、今は、このフォーラムが、私にとっても、私たちにとっても、どういう意味があるのか、わからない。時間が経って、このフォーラムを振り返ったとき、パネラーの発言に誤りがあり、その時、正しいと感じていた考え方も異なっているかもしれない。でも、それでいいと思う。すべてを正しく、すべてを分かっていることなどできない。

ただ、一つだけ言えるのは、地域をめぐる問いに対する正解も、解答もないということである。そして、この問いを持ち続けるなかで、個人も、地域も、どういう時間を経てきたのか、その歩みの過程を比較し、振り返ることによってのみ、地域を獲得できる可能性があると感じている。だからこそ、あの場に居合わせた私たちは、問いを持ち続け、5年、10年経ったときに、振り返る義務と責任がある。

そこで、である。赤坂先生にとって、定点の一つが京都にあるようだ。一方で、我々は、滋賀とは何かということを考えるうえで、京都を無視できない。いくつもの日本を考えていくうえで、これからも共に考えていきたい。また、地域学の広がり、連携という点においては、各地で地域学を独自に展開している方、例えば、山口で地域学を展開している安溪遊地さんなどとも議論を深めて行きたい。この他にも、食、建築、景観、日本、アジアといったさまざまなテーマや地域の広がりの中で、多くの問いが我々を待っている。

おそらく宣言と言っても過言ではない。これから「地域学はいかにして地域の将来像を描くのか」というテーマを貫き通して行きたい。そして、赤坂先生が花田清輝の書評を、私が赤坂先生の記事を携えて地域に向き合ってきたように、願わくば、まだ見ぬ後輩が地域に出かけるきっかけとなるよう、ここからはじまる地域という思想をめぐる旅の軌跡を積み重ねて、記録していきたい。

### ■第33回 定例研究会

1. 日時：平成23年3月31日（木）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

## 里川里湖のまちづくり ―守山市美崎町における自治会・行政・地元高校・大学の協働― 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

守山市美崎町を流れる準用河川大川は、かつては野洲川南流として流れの豊かな河川であり、自家消費用の「おかず漁業」が営まれる、生活と密着した河川でした。しかしながら、洪水対策等を目的とした1970年代の野洲川改修に伴い、上流からの水の流入のない河川となりました。また、現在の大川は、琵琶湖への河口部も砂州によりほぼ塞がれているため、閉鎖水域的な状況にあります。2000年以降はホテイアオイ等の水草が大量に発生するようになり



写真1: 大川河口付近に繁茂するホテイアオイ

り（写真1）、景観や水質悪化を危惧する声が、美崎町の住民から守山市へ寄せられるようになっていきます。

このような大川の現状に鑑み、2010年10月に、守山市、美崎町自治会と我々の京滋FS事業が連携し、大川の水質・景観の改善と地域資源としての活用を目指した総合的な川づくり計画策定のための体制がつけられました。美崎町の伊藤自治会長は、河川公園的な環境整備でも、かつての生態系の復元でもなく、その両者の中間的なイメージで、新しい河川像を描きたいと考えられています。これに答えるかたちで、京滋FS事業のメンバーである大西信弘氏（京都学園大学）より、「子供が夏休みの宿題に活用できる川」というキーワードが提案されました。自然の生態系の不確実性を保ちつつ、最低限の安全性が確保され、子供が安心して遊ぶことのできる川のイメージが、このキーワードによって関係者の間で共有されました。

美崎町自治会、守山市と我々の共同現地調査の結果、砂州で塞がれていると考えていた大川の河口部は完全には閉鎖されておらず、一定の流れがあることが確認できました。現在は、雨水以外には水の流入がほとんど期待できないため、大きな流れではあ

### 3. 発表者：豊田知八（亀岡FS研究員）

発表内容：「愛宕山麓の小集落・清滝再生への潜在力を求めて」

\*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

りませんが、近隣の農業用水（琵琶湖から水を引き、余った水は琵琶湖に戻っている）の余剰水を大川を通じて琵琶湖に戻すことで、大川に滞留する水に流れをつくることができないかを検討しています。

2011年1月からは、スーパーサイエンスハイスクールに指定された立命館守山高等学校が、その取り組みの一環として、大川での我々の活動に加わるようになりました。同校の先生と生物部員を中心に、大川の水質や底生生物などのモニタリング調査を担当してもらうようになりました。

また、2011年4月以降は、PLA（参加型学習行動法）やPRA（参加型農村調査法）の手法を用い、美崎町自治会の人々が知識やアイデアを出し合う場を設け、かつての大川が地域の生活とどのように関わってきたのかを明らかにすると共に、今後の大川活用の用途や意義についての意見交換を行う予定です。これは、自治会・行政・地元高校・大学が、具体的なイメージを共有するための出発点にもなると考えています。

2011年7月には、地域の子供に大川の環境を知ってもらうため、子供による水環境調査を美崎町自治会の主催で行う予定です。また、2011年8月には、立命館守山高等学校が水環境調査で提携しているシンガポールのCommonwealth Secondary Schoolの生徒を大川に招き、東南アジア研究所の招聘外国人研究者の方々も交えて、水をテーマにした国際交流を行う予定です。

これらの大川での活動の名称は、京滋FS事業の代表者である安藤和雄氏（東南アジア研究所）の発案で、「里川里湖のまちづくり」に決まりました。単なる水質環境改善ではなく、地域の生活と密着してきた「里川」としての大川、「里湖」としての琵琶湖の価値を再確認しながら、まちづくりのあり方を考えていきたいと思っています。



写真2：美崎自治会館での会議